

武蔵野市
中高生世代ワークショップ

Teens ムサカツ

令和5年度

武蔵野市 中高生世代ワークショップ

「Teens ムサカツ」事業報告書

武蔵野市
中高生世代ワークショップ

Teens ムサカツ

令和5年度
武蔵野市 中高生世代ワークショップ
「Teens ムサカツ」事業報告書

もくじ

| | | |
|-----|--------------|----|
| 第1章 | 事業概要 | 04 |
| 第2章 | 各回の記録 | 08 |
| 第3章 | 提言まとめ | 17 |
| 第4章 | 事業の実施結果と振り返り | 26 |
| 第5章 | 人材育成 | 32 |
| 第6章 | 参考資料 | 35 |



第1章 事業概要



1. 事業目的

■ 中高生世代ワークショップ「Teens ムサカツ」は、将来を担う世代が市政や地域活動等に関心を持ち、市の施策に関する理解を深めたり、自分たちの世代向けの事業についての提言を行ったりできる場をつくることを目的とした事業である。令和5年度は特に、参加者が自らの見識を「中高生世代の意見」として市に提言し、第六次子どもプラン武蔵野の内容等に反映させるための議論等を行った。

■ 令和5年度は、特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク(本部:東京都三鷹市)が本事業を受託・運営した。

■ 令和5年度のTeens ムサカツでは、『こんな場があったらいいな』を市政に」を年間テーマとして設定した。令和5年4月に施行された「武蔵野市子どもの権利条例」では、「市は、子どもが自分らしく居られる多様な居場所づくりを推進します」(第13条1項)と定めており、条例の内容を具現化していく上で、中高生世代がどのような「居場所」を求めているのか、当事者たちの願いや要求をまとめていくことをねらいとした。

■ プログラムを立案するにあたり、以下の4点を重視した。

- ① 中高生世代にとって身近なテーマである「居場所」について、中高生世代が日常生活において感じている困りごとや、市内の既存の居場所等を利用する上での利用しづらさ、過ごしづらさなどから、その背景にある願いや要求を明らかにしていくこと。
- ② 安心・安全な話し合いの場をつくること。そのために、単発のワークショップではなく、全6回の継続的なワークショップを通して、担当するファシリテーターと参加者との信頼関係づくりや、参加者相互の関係づくり、互いの想いを聴きあう集団づくりを重視する。
- ③ 事業のアウトカムとして、中高生世代の意見を「提言」として市政に伝えるとともに、それに対するフィードバックをもらうこと。小さな変化でも、「自分たちの声によって、周りが動いた、状況が変化した」という体験を通して参加者の自己効力感を高めていくことを大事にする。また、最終的な「提言」だけでなく、各回の議論を記録として残し、本報告書に記載することで、中高生世代ならではの視点や表現等を「第六次子どもプラン武蔵野」の内容等に反映しやすくする。
- ④ 「声を聴かれにくいこども・若者※」の声を集める工夫を設けること。実施団体内外のネットワークを活用し、不登校経験のある中高生世代、経済的に困窮な家庭の中高生世代、障がいのある中高生世代など、さまざまな背景の中で生きる当事者の声を集める工夫を行う。

※ 詳しくは、こども家庭庁が策定した「こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン(全体版)」p.50~52を参照。

2. プログラム概要

■ 令和5年度は「『こんな場があったらいいな』を市政に」を年間テーマとし、以下の通り全6回のプログラムを実施した。

| | |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">第1回</p> <p>日時 8月18日(金) 13:00~15:00</p> <p>場所 武蔵野グリーンセンター</p> <p>概要 お互いを知る</p> <ul style="list-style-type: none"> 年間テーマおよびプログラム概要を伝えた。 参加者が普段利用している市内の場所をマッピングし、「こんな場があったらいいな」を考える上での小テーマを抽出した。 | <p style="text-align: center;">第2回</p> <p>日時 9月18日(月・祝) 13:00~16:00</p> <p>場所 武蔵野プレイス</p> <p>概要 考える(練習編)</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ①「デザイン思考を学ぼう」に取り組んだ。 物事を多角的にとらえること、自分視点だけでなく他者視点に立って考えることを学んだ。 |
| <p style="text-align: center;">第3回</p> <p>日時 10月22日(日) 13:00~17:00</p> <p>場所 武蔵野市役所</p> <p>概要 考える(実践編)</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークショップ②「『こんな場があったらいいな』を考えよう」に取り組んだ。以下の3つのグループが形成された。 A. 「中高生(同)世代交流ができる場」 B. 「多世代が交流できる場」 C. 「運動・スポーツができる場」 | <p style="text-align: center;">第4回</p> <p>日時 12月10日(日) 13:00~17:00</p> <p>場所 武蔵野市役所 および 各フィールドワーク先</p> <p>概要 出会う</p> <ul style="list-style-type: none"> グループごとに、施設見学やアンケート調査、ゲストインタビュー等のフィールドワークに取り組んだ。 |
| <p style="text-align: center;">第5回</p> <p>日時 2月12日(月・祝) 13:00~17:00</p> <p>場所 武蔵野総合体育館</p> <p>概要 深める</p> <ul style="list-style-type: none"> 「武蔵野市子どもの権利条例」および「子どもプラン武蔵野」についての理解を深めるために市職員よりレクチャーを受けた。 ワークショップ③「市政への提案を作ろう」に取り組んだ。 | <p style="text-align: center;">第6回</p> <p>日時 3月10日(日) 11:00~17:30 ※市政提案会は13:30~15:30で実施</p> <p>場所 武蔵野プレイス</p> <p>概要 伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 市政提案会「『こんな場があったらいいな』を伝えよう」を開催した。全体発表およびポスターセッションを通して、市長・教育長をはじめ市職員に提案を行い、フィードバックをもらうことで、最終的なまとめを行った。 全6回の振り返りおよび修了式を行った。 |

※ 第3回の欠席者のフォローアップ回として、10月29日(日)および11月12日(日)に、1時間程度のミニワークショップを行った。

3. ワークショップ参加者について

■ 本事業の対象・広報・参加動機については以下の通りである。

| 対象 | 広報 | 参加動機 |
|---|---|--|
| <p>対象者</p> <p>武蔵野市在住または在学の中高校生世代</p> <p>応募者数</p> <p>26人/定員30人</p> <p>参加者の構成</p> <ul style="list-style-type: none"> 中学生年代: 13名、高校生年代 13名 市内在住: 18名、市内在学: 8名 過去のムサカツ事業参加者: 8名 | <p>周知方法</p> <p>市報、市ホームページ、市公式SNS(LINE, X(旧ツイッター), Facebook)、むさしのFM、チラシ配布</p> <p>チラシ配布場所</p> <ul style="list-style-type: none"> 全市立中学校 市立以外の市内中・高等学校 市関連施設(図書館等) | <p>第1回の「振り返りシート」にて、Teens ムサカツへの参加動機について質問項目を設定した。参加者の回答を運営事務局で整理し、以下のように項目分けをした。</p> <ul style="list-style-type: none"> A 昨年度までの Teens ムサカツに参加して、たのしかったから B 中高生世代の人と(学校外の人と)話しかう機会がほしかったから C 市(市政)について知りたかったから D 学校でチラシをもらって興味を持ったから E 友だちに誘われたから |

4. 運営体制について

■ 実施団体において、事業統括責任者1名および運営事務局4名の実施体制をつくり、年間プログラムを企画・運営した。ワークショップ実施にあたっては、市担当課と毎回事前に打合せを行い、ワークショップの進捗および参加者の様子を共有した上で、ワークショップ内容を協議し決定した。

■ 各回のワークショップ全体を進行する「メインファシリテーター」は、事業統括責任者および運営事務局職員が担った。実施団体が運営するフリースクール事業等において、中高生世代と関わってきた経験が豊富な職員を配置した。また、小グループにおける話し合いを補助する「グループファシリテーター」として、実施団体が大学生等を募集し、配置した。実施団体職員よりも参加者と年齢の近い大学生等が話し合いのサポート役を担うことで、参加者との関係づくりや意見を言いやすい雰囲気をつくることを期待した。

なお、グループファシリテーターのファシリテーションスキル向上のため、以下の取り組みを実施した。

- 1グループに複数のファシリテーターを配置し、相互の気づきを促すこと
- 実施団体職員をグループファシリテーターとして2名配置し、必要に応じて助言等を行うこと
- 初回から段階的に役割を広げ、徐々に大きな役割を担ってもらうこと
- 事前および事後の振り返りを丁寧に行い、関わりを振り返る機会をもつこと
- 「ファシリテーション研修」を年2回実施し(詳細は第5章に記載)、ファシリテーションに必要な基礎的な視点および姿勢を身につけること

■ グループファシリテーターの構成は以下の通りである。

| グループファシリテーターの構成 | | |
|-----------------|----|--------|
| 大学生…………… | 9名 | 合計 12名 |
| 社会人…………… | 1名 | |
| 実施団体職員…………… | 2名 | |

※ 大学生は、市内の成蹊大学の他、国際基督教大学、杏林大学等、近隣の大学に所属する学生が半数以上を占めている。また、4名は、実施団体が運営するフリースクール事業や学習支援事業にボランティアとして継続的に関わっている学生である。なお、過去のTeensムサカツ参加者(現在は大学生)が1名参加した。

■ 上記のほかに、当日の会場設営や備品準備、記録写真の撮影等を行う「会場運営補助者」として、市民1名を含む3名の若者とコーディネーター役の実施団体職員1名が参加した。

※ 募集は、実施団体が運営する「むさしの地域若者サポートステーション」を通じて行った。さまざまな背景のもと就労を目指す若者が、ワークショップの準備等「周辺の仕事」から場に参加することで、活動の足場を広げていく機会となることを期待した。

■ 毎回実施前に、事業責任者、運営事務局、およびグループファシリテーターで、事前ミーティングを行い、各回の目的やワーク内容、各グループのメンバー構成等を確認・協議した。また、実施後の振り返りミーティングでは、各グループでの話し合いの様子を細かく共有するとともに、参加者一人ひとりの様子を共有し、「安心・安全な話し合いの場」をつくるために、どのようなかわりが必要か、ファシリテーターとして大事な視点を検討・共有した。



第2章 各回の記録



第1回

お互いを知る 武蔵野市内にある‘居場所’を知ろう

日時 2023年8月18日(金)

場所 武蔵野クリーンセンター
見学者ホール

参加者 22人

実施プログラム

1. 事業概要説明

Teens ムサカツの概要を武蔵野市担当課より、今年度のテーマや1年のスケジュールを事業受託団体である特定非営利活動法人文化学習協同ネットワークより説明を行った。

2. アイスブレイク

昨年度からの継続参加者だけでなく、新規参加者をはじめ今年度関わるスタッフとの顔合わせとなるため、6グループに分かれて自己紹介ワークを行い、プログラム中に使用するニックネームを周りの参加者のアイデアも参考に作成した。



3. ワークショップ

年齢差生活圏の幅を考慮し、参加者を中1年齢、中2～高1年齢、高2～高3年齢の3グループに分け、武蔵野市全図を使用しながら、参加者が「普段どこで、どんな施設を利用しているのか？」をシェアし合いながら同世代がどんな生活圏で、必要に応じてどんな施設(お店)を利用しているのかを知り、運営側である我々も年間テーマである「こんな場があったらいいな」を議論していく上での手がかりを作っていく機会とした。



実施目的

Teens ムサカツについて知り、
今年のテーマや概要を理解してもらう
参加者同士が年間を通じて集い、
提案を作る仲間であるという
意識を持ってもらう

所感

総申込者26名中、22名の参加があり、年齢、性別ともにバランスの良い参加者分布となった。第1回は、参加者同士が知り合うこと、そして今後Teens ムサカツに参加するハードルを少しでも低くすることを第一義として実施した。

私立学校からの参加者が多く市内在住者(生まれ育った環境下での親しみのある施設)が少ない印象、公共施設をあまり利用していない肌感覚を得ながらも参加者の雰囲気は良好で、実施目的は達成できたと評価できる。

第2回

考える方法を学ぶ
デザイン思考を学ぼう

日時 2023年9月18日(月・祝)
場所 武蔵野プレイス フォーラム
参加者 18人
講師 筒井 一郎氏(ヌールエデザイン総合研究所)

実施目的

大テーマ「こんな場があったらいいな」を
考えていくうえで、小さくまとまりがちな
発想を広げる
「アイデアを出す」ための
視点や考え方を学ぶ

所感

「日本的な」あるいは「普通の」視点から解放されたアイデアを考えるということを経験することで、新しい視点で物事を考えた先に今後の市民社会がより成長することができる可能性を実感しうる貴重な機会に繋がった。

一方で、考える機会、思考を深める機会として設定した第2回だったが、結果的に内省的なインプットが中心になったことは、論理的思考を伴う作業に苦手意識を持つ参加者にとっては精神的負担が大きかったこと、事業スタート間もない参加者たちをしっかりと集団としてまとめるプログラム構成を行う必要があったことが第3回以降の参加者動向を鑑みると推察できる。

実施プログラム

1. 「クリエイティブ」「デザイン思考」とは(座学)

ゼロから発想し、創造するということはそもそもどうしたことなのか、答えのない課題を解決していくための考え方のポイントを従来の思考パターンや事例をもとに学んだ。

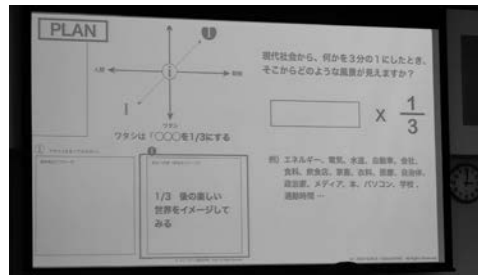
2. 「自分自身の思考のクセを知る」

特性診断(エニアグラム)で自分自身の考え方の傾向を知り、今後のアイデアづくりや思考整理を行ううえでの材料とする。



3. ワーク「1/3」

2のワークを経て、設定された動物にポジションチェンジを行なったうえで、新しい視点で環境・社会問題を見つめる。実在する「何か」が3分の1に減った時、減った分だけ良くなること、幸せになる社会とは?という問いをもとにワークを行なった。



第3回

願いを知る、考える ‘こんな場があったらいいな’を考えよう

日時 2023年10月22日(日)

場所 武蔵野市役所 802会議室

参加者 7人

実施プログラム

1. グループセッション

第1回の参加者の関心事を6つの小テーマを仮設定し、事前に実施したアンケートをもとに、テーマ毎に分かれて興味関心について共有し合った。セッションをベースに自分なりに深めたい事柄を言語化し、それぞれの願いに共通点を見つけながら提案作りに向けたグループづくりを行なった。

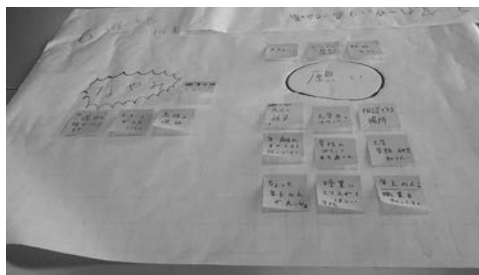
6つの小テーマは以下の通り。

- ・ 勉強する場
- ・ 室内でゆっくり過ごせる場
- ・ 運動・スポーツができる場
- ・ 多世代交流ができる場
- ・ 中高生(同)世代交流ができる場
- ・ 進路について考える場



2. グループワーク

【運動・スポーツができる場】【多世代交流ができる場】【中高生(同)世代交流ができる場】の3つのグループに参加者が分かれ、共通点を探りながら具体的にグループ全体で作成する提案を言語化し、提案に向けてどういった準備(情報、視点など)が必要かを話し合いながら、第4回のフィールドワーク先の候補についても意見を出し合った。



実施目的

参加者それぞれが持つ問題意識や取り組みたいテーマを具体的に言語化し、他者に共有する

右記をもとに、今後の取り組みにおけるグループとしてのゴールを設定し、そこに至るアプローチ方法を検討する

所感

様々な事情が重なり、参加者が総数のうち3分の1以下となった。各参加者の興味関心に応じて6グループに分かれてのセッションを2回行う予定だったが、セッションによっては1名しか参加者がいないという状況もあったため、結果的にグループセッションの数を削減、それにに応じて提案づくりに向けたグループも3つに絞られることになった。

少人数だからこそ、一人ひとりの話や想いを聞き合う時間を長く設定でき参加者の満足度は低くはなかったものの、参加者がイメージする「こんな場がほしい」はイメージの域を出ないこともあり、すべてのグループが明確なテーマ設定をやることに苦労していた。

第4回

場所、人と出会う
フィールドワーク

日時 2023年12月10日(日)
場所 武蔵野市役所 802会議室
およびフィールドワーク受入施設
参加者 17人※

実施目的

「こんな場があったらいいな」を提言の形にしていくために、施設の見学やインタビュー、アンケートなどのフィールドワークに取り組む提案づくりに必要な情報を集めるとともに、参加者以外の多様な視点に出会う。

※ 第3回実施時、欠席者が多かったため第4回の実施に向けて、調整がついた12名については第3回のワークのフォロー及び第4回のフィールドワーク先の希望についての聴き取りを10月29日(日)および11月12日(日)に対面で行った。

実施プログラム

1. フィールドワーク

A: 中高生世代が交流できる場(施設見学)

参加者3名

→境南コミュニティセンター(境南コミュニティ協議会会長 後藤順一さん)、武蔵野プレイス(矢澤 梯子さん)

B: 多世代が交流できる場

(ゲストによる活動紹介) 参加者8名

→神村美里さん(TeensTown むさしの)
中村勇太さん(ぶらっと吉祥寺)
谷村一成さん(NPO 法人 greenbird)

各ゲストの行っている取り組みについて活動の背景や想い、活動内容について話を聞き、座談会形式で意見交換を行った。

C: 運動・スポーツができる場(施設見学)

参加者6名

→武蔵野総合体育館
(緒方光さん、河内幸子さん)

2. グループセッション

施設見学やゲスト講義を経ての気づきや感想を共有し、最終回の提案作りに向けて課題やアイデアなど出し合いながら具体的な提案作成に向けた基礎作りに取り組んだ。

所感

第3回の参加者が少数だったこともあり、フィールドワーク後のグループセッションは前回のワークを再度繰り返さざるをえない形となった。しかし各参加者がこれまでイメージのみで語っていた事柄が、施設や取り組みの実際を知ること、議論に厚み生まれ、より現実的な議論に進む機会ともなった。各参加者の想いを集約しながら、どういった提案作りになっていくのかグループファシリテーターの試行錯誤が始まった。

フィールドワーク各グループ詳細

Aグループ 「中高生世代が交流できる場」

「友だちと気軽に行ける場が近くにない」「同世代の友だちをつくりたい」などの声を受け、市内で中高生世代が集っている境南コミュニティセンター(以下、境南コミセン)と武蔵野プレイスの2か所を見学した。

近年リニューアルされた境南コミセンの館内はとても綺麗で、当日は小中学生がロビーで勉強したり、体育室でスポーツをしたりしていた。館内には「自習スペース」もあり、高校生世代の利用が多いとのこと。近くに武蔵野プレイスがあるが、人が多くて入れなかったり、賑やかで勉強しづらいという理由で小規模なコミセンを選んできているというお話もあった。

武蔵野プレイスでは、地下2階の青少年フロアを中心に見学をした。青少年フロアの掲示板に、中高生世代が想っていることを自由に紙に書いて貼



れるコーナーがあり、参加者は熱心にそれを見ていた。特に注目していたのは、一つ一つの声に職員さんが丁寧に「お返事」を書いて貼っていたことで、「みんな誰かに話を聞いてほしいのかな」という感想も出ていた。

実際の「場」を見学したことで、「どうしたらもっと利用しやすくなるのか」について、利用方法や開館日などの具体的なことから、場の規模や雰囲気、過ごし方に関わることまで中高生目線から様々な意見や感想が出てきて、その後の提案づくりにつながるフィールドワークとなった。

武蔵野プレイス 利用状況アンケートの実施

Aグループでは、中高生世代の武蔵野プレイスの利用実態を知るために、アンケートも実施した。第3回の最後に、グループのメンバーで質問事項を考え、それに基づいて運営事務局でアンケートフォーム(オンライン形式)および告知チラシを作成して実施した。ただ、その後の第4回、第5回とグループのメンバーの参加が安定しなかったこともあり、アンケートの回答結果を市政提案づくりに十分に活かすことができなかった。

<実施概要>

- ・実施期間:2023年11月18日~12月31日
- ・告知方法:武蔵野市SNS、武蔵野プレイス青少年フロア来館者、ムサカツ参加者へのメール、等
- ・回答者:60名 ※対象は「市内在住・在学の中高生世代」

<結果概要>

- ・回答者属性としては、中学生が53%、高校生が43%で、市内在住が76%、市内在学が23%であった。そのうち、「武蔵野プレイスを利用したことがある」と回答したのが86%(52名)で、以下は「利用したことがある」方への質問事項に対する回答である。
- ・利用目的(複数回答可)については、「学習」が72%、「図書館の利用」が70%、「友だちと一緒に過ごす」が56%であった。利用時の人数については、「1人」が51%、「2~3人」が38%、「4人以上」が9%であった。
- ・利用の仕方やプログラムに関する要望には、「少し話しても良い勉強スペースをもっと増やして欲しい」「人多い」「休館日をなくしてほしい。かなり不便」「地下二階に席を追加していただきたいです」「使い方をもっとわかりやすくしてほしい。」などの回答があった。
- ・在住の地域(在学の場合は学校所在地)は、武蔵境地域が60%と過半数を占めており、交通手段(複数回答可)についても、「自転車」「徒歩」がともに51%だったのに対して、「電車」が23%、「バス」が3%であった。

フィールドワーク各グループ詳細

Bグループ 「多世代が交流できる場」

「多世代が交流できる」というキーワードだけでは分野も広く、適当な常設の施設も見つからないという事情で、様々な手法で交流するキッカケを生む活動をしている方を招いての座談会を実施した。3名の各ゲストスピーカーからの活動紹介ののちに、座談会形式で参加者それぞれが感じるモヤモヤや話したいテーマについて意見交換が始まり、徐々に「多世代交流」に関する話題へと移った。大人と出会って、話をして、進路を考える材料になるような場が欲しいという人、子どもが好きだけど、小さい子と出会ってお世話をする機会が無いと話す人、大人と対等に社会問題について語りたくない人



…etc、色々な方向に話は広がっていくなかで、「自分たちが」欲しい場を考える上で、大人の関与やサポートはどれくらい必要なんだろう？あるいは、自分たちで「場」の運営はできるのか？？そんな少し違った切り口の話にも触れることになった。

Cグループ 「運動・スポーツができる場」

今回の見学ではこれまでほとんどの参加者が利用する機会のなかった各種道場を含めて見学をし、体育館の機能や利用方法について担当の方から話を伺った。

また、職員さんからは「ストリートスポーツ広場」ができた経緯についても説明してもらった。この「ストリートスポーツ広場」はスケートボードやBMXができる施設で多くの子どもや若者が利用しているが、市民からの作って欲しいという手紙がきっかけとなって作られたと説明していただいた。自分たちの思いや願いを届けていこうとしているメンバーたちにとっては見本ともなるような事例で勇気をもたらったのではないだろうか。

フィールドワークを終えて、会場に戻ってからは感



想を交流し、どんな場が欲しいのか改めて自分たちの願いを出し合い、「利便性を考えたら駅から近い方がいい」、「地下だったら騒音問題も解決するのではないか」、「駅前の道を歩行者天国にして、そこにバスケットゴールを置いたらいいのではないか」など、今後につながる多くの意見が出てきていた。

第5回

提案を作る、深める

日時 2024年2月12日(月・祝)

場所 武蔵野総合体育館 大会議室

参加者 19人

実施プログラム

1. 座学「そもそもムサカツの実施目的とは?」

第5回を通じて作成する提案を【誰に】【なぜ】伝えるのかということを通認識としてもらおうことを目的として担当所管課である子ども子育て支援課子ども政策係の職員より、ムサカツの実施目的、まちづくりにおいて中高生世代の声を表明する意義について、武蔵野市子どもの権利条例にも触れながらミニ講義を行った。



2. ワーク

最終第6回の枠組みを参加者に伝えたくて、第4回のフィールドワーク、およびグループセッションを土台に提案作成に取り組んだ。作成におけるポイントを予め指定し、提案の基本構成を以下の3点とした。

- A. 願い「こんな場がほしい」
- B. 背景「なぜその願いを持ったのか」
- C. 具体案・要望「実現に向けたアイデア」

また、具体的制作物に関しては、

- ①発表用スライド
- ②ポスターセッション用模造紙
(詳細版・各グループごと)

以上2点の制作をワークに組み込んだ。スライドについては基本的なひな型を予め準備しイメージをやすくする一方で、模造紙については各グループのグループファシリテーターと参加者が目指す提案に応じたグループごとの作成とした。



実施目的

提言を作る前提として、「Teensムサカツ」の実施目的を再確認し、「誰に」「何を」「なぜ」伝えるのか、伝えた上で何が変わっていくのかを共有する

最終回に向けて、各グループで提案作りに取り組み、発表に必要な制作物を準備する

所感

改めて本事業実施の目的を参加者におさえてもらうことでより明確に相手や提案をイメージしてもらうこと、そして最終回に向けて最低限の提案づくりが終了することを目指す回となった。この回においては、各グループの進捗や参加メンバーの状況に応じて、サポートの加減や進行方法など事前の準備段階からグループファシリテーターによる試行錯誤が大きい回ではあったものの、明確なゴール(提案会)に向けた具体的な作業を通じて参加者たちの議論や交流は一層深まった様子が伺える。

第6回

伝える／市政提案会
「こんな場があったらいいな」を伝えよう

日時 2024年3月10日(日)

場所 武蔵野プレイス
フォーラム

参加者 15人

実施目的

各グループの「提言」を
市長・教育長および関係者に伝える

「提言」について市長・教育長および関係者から
フィードバックをもらい、それを踏まえて、
各グループの取り組みを締めくくる

所感

「提案会はムサカツ参加者の子どもたちのもの」というコンセプトで、最低限の運営（司会、開会挨拶）を子どもたちで行ってもらおう形とした。最終回ではあるものの残念ながら、11名が不参加であった。参加者1名で発表や意見交換をするグループも出たものの、結果子どもたちの力に助けられ提案会を終えることができた。

実施プログラム

1. 最終準備

午後の提案会に向けて、発表原稿作成やリハーサルなど各グループで最後の詰め作業に取り組んだ。

2. 市政提案会

「こんな場があったらいいな」を伝えよう

提案会参加者／小美濃市長、竹内教育長、武蔵野市役所関係各課（子ども子育て支援課、児童青少年課、企画調整課、資産活用課、市民活動推進課、生涯学習スポーツ課）、フィールドワークでお世話になった関係者の方々

タイムテーブル

- ・ 全体発表: 全4グループ各5分程度のスライドによる全体発表
- ・ ポスターセッション: 全4グループが作成した模造紙を展示したブースを設置。提案会参加者は自由に各ブースを回りながらムサカツ参加者と10分/グループを目安に意見交換を行った。
- ・ 市長、教育長による講評: 各グループの提案に対するフィードバック、意見交換での感想など

3. ふりかえり、まとめ

提案会参加者が退場の後、グループごとに提案会を終えての感想交流を行い、市長、教育長などから寄せられた感想や意見をもとに提案を再検討し、提案の最終決定をもって全6回のまとめとした。

4. 修了式

グループファシリテーターより1名ずつ修了証を手渡し、一言ずつ感想をまわす形で修了式を行った。



第3章 提言まとめ



第1部 | 全体発表

A
グループ

中高生(同)世代交流ができる場

発表用スライド

市政提案の内容 ※1

テーマ
中高生同士で話したい！
つながりを増やしたい！

グループの願い

中高生同士で話したい！
つながりを増やしたい！

説明(背景など)

現状

- ・中高生主催のイベントやワークショップが少ない
- 中高生ならではの視点が活用されていない
- ・中高生が利用しやすい雰囲気や制度のある施設が少ない
- 中高生利用率の低迷

- ・「友だちと気軽に集まれる場がほしい」「もっと同世代と話したり、つながりをふやしたい」「そのきっかけとして、学校外の企画や活動があったらいい」、などの願いに対して、話し合いや施設見学を通して以下の課題が見えてきた。
- ・一つは、中高生が利用しやすい雰囲気や制度のある施設が少ないので、中高生世代の市の施設(たとえばコミュニティセンター)の利用率が低いこと。
- ・もう一つは、中高生主催のワークショップやイベントが少なく、中高生ならではの視点が活かされていないこと。

提案

①中高生に向けての利用促進

～中高生を含めた多世代が利用しやすい仕組みに～

現状

- ・施設に直接行って予約しなくてはならない
- ・複雑な予約システム
- ・利用水準が高い

提案

- ・ネット上でも予約可能に
- ・予約方法の簡略化
- ・利用水準の引き下げ

■提案①:中高生に向けての施設利用の促進

- ・中高生世代が公共施設等を利用することを促すためには、世代や使用目的で場所を分けるなど、中高生を含めた多世代が利用しやすい空間をつくる必要がある。中高生は、同世代が少ない場所には行きづらいので、「当たり前」に中高生世代が居られる場を増やしたい。
- ・施設予約の際に(特にコミュニティセンターについて)、公式サイトからのウェブ予約を可能にするなど、利用手続きを簡略化し、わかりやすくすることも必要。

②多くの人に知ってもらうための魅力的な告知と宣伝



各種SNS
の活用



放課後の活動場所
として利用を促進

「そんな場所知らなかった」をなくす!

■提案②:多くの人に知ってもらうための魅力的な告知と宣伝

- ・中高生世代が友だちと集まれる場所やグループ活動等のために使用できる施設について、各種SNSで告知することや学校の活動場所として積極的に利用してもらうことが必要。
- ・多くの人に知ってもらえる機会を増やし、「そんな施設知らなかった」ということをなくしたい。

③

学校外で取り組める活動がしたい!

自分たちで自分たちが使う施設の布教がしたい!

話し合うテーマも自分たちで決め、より豊かな発想を生むことができる機会を増やしたい!

同世代と話し合える場が欲しい!

→ 中高生の視点から作る、中高生による、中高生のためのゼロからの企画

■提案③:中高生の視点から作る、中高生による、中高生のためのゼロからの企画

- ・ワークショップ等の企画段階から中高生が参加すれば、中高生の視点に立った企画が生まれ、同世代の参加者が増える。
- ・ムサカツのような場でも、話し合うテーマを自分たちで決め、より豊かな発想を生むことができる機会をつくりたい。

第2部 | ポスターセッション ※2

まず一つの気づきとしては「子ども」を一括りで考えないでほしいという話です。何か取り組みを行う際に中高生は一緒にできるかもしれないが、小学生はなかなかまだ入れないという話がありました。そこに年代別のハードルがあったのかと思いました。もう一つは、場の使い分け。勉強したい人もいるかもしれないけれど、ワーワー騒ぎたい人もいます。もし場を作るにしても用途に応じて分けてほしいという要望をいただきました。一つの場を作るだけではなく、やりたいことによって分けたり、防音をしたり、そういうことも必要なですね。そして最後に、公共施設の定休日についてです。水曜日が一番授業が早く終わるので、放課後の時間を一番使える水曜日に開けて欲しいということです。これは今後しっかり参考にさせていただきたいなと思いました。

——— 小美濃市長

市長・教育長の
講評

同世代と交流できる場を設けたいという提案でした。お話を聞いていてよく分かったのですが、「場」という意味には2つあって、物理的な空間なのか、それともイベントのような機会なのか。お話を伺っているうちに後者のイベントなどの機会を設けてほしいということだと分かり、私自身すごく理解が進みました。そういう機会が改めて大事だなと感じました。

——— 竹内教育長

来場者のコメントふせんより

- ・ 武蔵野プレイスでできるようなこと(特にB2の青少年フロア)が、吉祥寺エリアや中央エリアなど、もっと数がほしいというのはとても共感できる。
- ・ 0から企画するのは、その過程で仲も深まるので良いと思った。
- ・ 市にどのような施設や団体があるのかをより知ってもらえると可能性が広がると思いました。
- ・ ただ「中高生集まって」だけだと想像しづらいけど、このイベントをするので準備段階から手伝ってもらえませんか?だと考えやすい。
- ・ 自由にテーマを選んで話せる場(ex 武蔵野プレイスで行われている「もやっとプレイス」)で話す。同じところで繰り返しかえし会うと親しくなっていく。
- ・ 待ち合わせができる場所づくり
- ・ 中高生のために、水曜午後を利用できる施設を!
- ・ 中高生に、コミセンの魅力発信をしてほしいと思いました。
- ・ 来年度のムサカツのテーマ決めも中高生主導でできないか?と考えました。

来場者との意見交換より

【質問】ゼロからの企画づくりというのは具体的には? どうやって実現する?

→中高生が集まって、やりたいことや中身をみんなです決めるところから企画をつくってみたい。そのためには、中高生が日常的に集まる場所を増やすこと。例えば、コミセンに中高生が多く来るようになれば、そこで企画を練ることができる。

【質問】「中高生が利用しやすい雰囲気」とは具体的には?

→「コミセンの受付を中高生がする」というのはいいかも。自分の知り合いや友だちがいると、行きやすくなる。

【質問】なぜ「学校外」でやりたい?

→(当日の意見交換からではなく、模造紙のふせん記録より)学校だといつものメンバーの前で、どう思われるか気になって、本当に思ったことを言いづらいときもある。だから、学校とは違う場もあるといい。

※1 当日の発表原稿をもとに、運営事務局で言葉や説明を補った

※2 最終的な提案に載らなかった声も含めて、ポスターセッション用模造紙のふせん内容を第6章に掲載

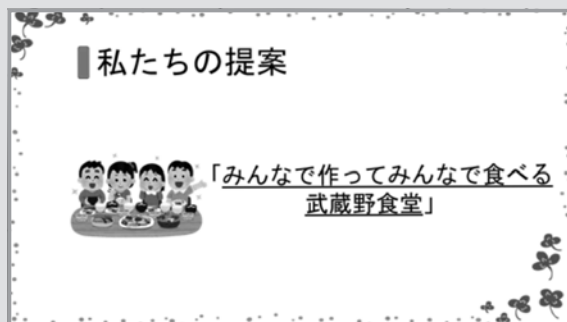
第1部 | 全体発表

B
グループ
①

多世代交流ができる場

発表用スライド

市政提案の内容 ※1

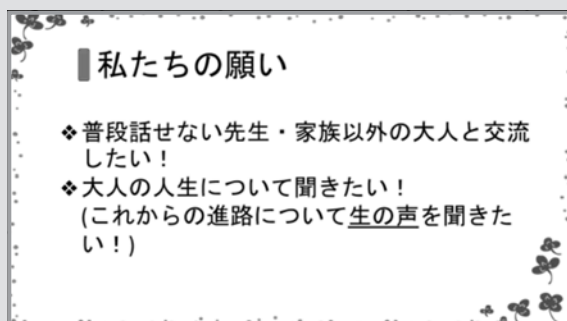


グループの願い

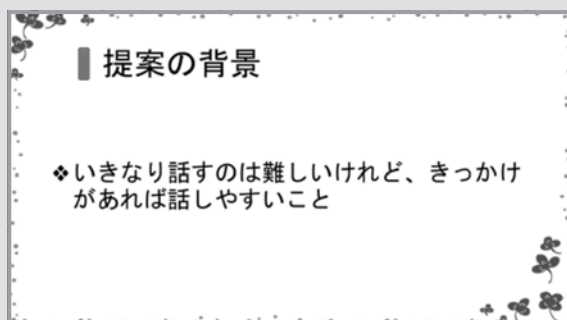
普段話せない先生・家族以外
の大人と交流したい！
大人の人生について生の声を
聞きたい！

説明(背景など)

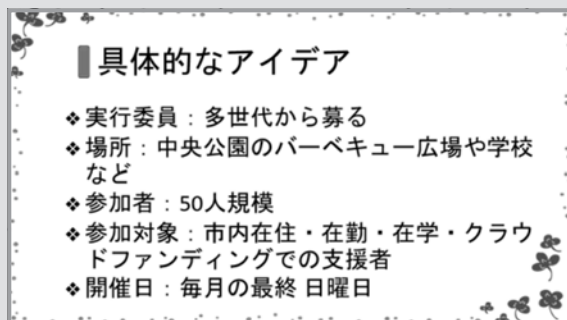
このグループは高校生が中心となって提案を作成したこともあり、将来を見据えて普段関わらないような大人と交流し話を聞くことで進路を考える参考にしたい、あるいは程よい距離感の大人に悩みを相談したいという願いをどうやって実現するかを考えた。大人と話しがしたいと思っても、ただ集まる場所を作って話を聞かせてほしいというのは大人にとっても子どもにとっても話じづらかったり何を話せばいいかわからなくなったりすることから「食堂」の運営に向けた提案へと進んだ。



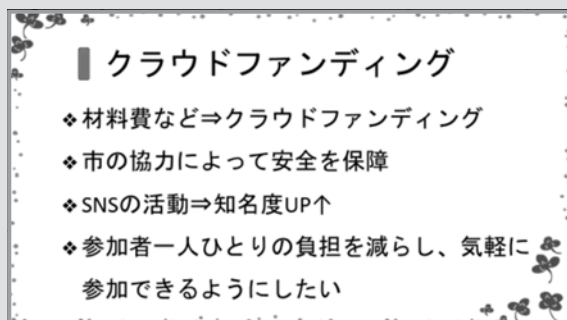
提案



■提案:みんなで作ってみんなで食べる武蔵野食堂
上記のような願いから、まずは参加者同士と一緒に料理を作ったり、みんなで作ったものを食べる過程を大切に、信頼関係を築きながら交流する「食堂」の運営を考えた。



■実施に向けたアイデア①:多世代で運営する実行委員会
武蔵野食堂の運営を行うための実行委員会を組織し、委員は世代ごとに定員を設けて募集することで、子どもから大人まで多世代の意見を取り入れた食堂づくりを行う。中枢の決定は子どもが担い、大人が用意した環境ではなく子どもの意見が大切にされる運営環境を作りたい。



■実施に向けたアイデア②:クラウドファンディングによる運営資金づくり
運営において食事に必要な材料費や施設の借費用などの必要経費を参加費で賄う場合に小学生など小さい子どもたちが参加しにくい可能性がある。そこで、クラウドファンディングを活用し、資金の調達を行う。その際、挑戦を通じてSNSで活動予定や活動記録を発信して知名度を高め、また何らかの形で市に協力をしてもらうことで武蔵野食堂の取り組みへの信頼性を担保していく。

第2部 | ポスターセッション ※2

毎月1回ということなので、施設を作ってほしいという話ではなくて、そういう空間と時間、あとは食材を買ったりする予算が欲しいということでした。子どもたちはSNSで集まってくるかもしれませんが、そこに大人をどうやって集めるかということディスカッションさせていただきました。例えば終わった後に昔遊びを教えてくださいませんかとか地域の誰かに声をかけると、誰かが反応してくれます。その誰かがまた誰かにと繋がっていくと、人の連鎖で大人が集まってくるかもしれません。基本的に大人は非常に恥ずかしがり屋です。楽しそうなことやっているかもしれないけれど、自分には無理かなと思ってしまうのは多くの大人の考え方だと思います。いかに大人をこの場に引っ張り出していくのかということが非常に大事ななと思いました。

——— 小美濃市長

市長・教育長の
講評

50人という規模感が適切なのかどうかというのが疑問でしたが、参加する側と企画する側を合わせるとそれぐらいの規模になるということがわかりました。また、クラウドファンディングも有効に上手く活用していくんだなということを感じました。

一番大きかったのが距離感を感じずにコミュニケーションを取れることが大事だというお話です。多世代が交流する機会では重要なのかなと感じました。

——— 竹内教育長

来場者のコメントふせんより

- ・ たしかに料理したり食べたりできると参加の敷居が低くていいなと思った。
- ・ 顔見知りになれる頻度ということで、月一回と設定していたのが、なるほどと思いました。
- ・ 食事だとそれでもいろんな文化の食事にふれられるので、異文化との交流の機会にもなりそう。
- ・ 「あえて会場をいろんな場所にする」→いろんな人が来るきっかけになるアイデアナイス!
- ・ コミセンの利用がしにくい点があることは市の課題と思いました。
- ・ 最初の広報をどうするのか、大人をどう巻き込んでいくのかを詰めると思現性があると思った。
- ・ 定期的な炊き出しは防災にもつながるかも。

来場者との意見交換より

【質問】広報やクラウドファンディングを行うイメージは？

【応答】最初はポスター・自分たちの口コミなどから始めていく必要がある。SNSについては継続的な発信を怠らないようにしないといけないと思う。

【質問】食べ物は、逆に市が運営するからこそその難しさ(安全性)はあるかもしれない。安全性という意味では、大人が不特定に入ることの危険性をどうとらえるか？

【応答】衛生面に関しては、知識や資格のある大人の協力を得たり、実行委員も自分たちで資格を取得する必要があるかもしれない。大人だけでなく不特定多数の参加者の出入りはリスクが伴うので、連絡先など立場に応じて必要な情報提供はしてもらう必要がある。

※1 当日の発表原稿をもとに、運営事務局で言葉や説明を補った

※2 最終的な提案に載らなかった声も含めて、ポスターセッション用模造紙のふせん内容を第6章に掲載

第1部 | 全体発表

発表用スライド

市政提案の内容 ※1

やりたいことを実現
できる場がほしい！

グループの願い
やりたいことを
実現できる場がほしい！

説明(背景など)

□課題
やりたいことを実現する際に、
"子どもだから"という理由で
生じる障壁の存在

やりたいことの実現を掲げた際に、'子どもだから'という理由で生まれる障壁が存在する。
個別具体的に多世代が交流できる場についての願いをそれぞれ持っている中で、まずは自分たちがそういった場を主体的に運営するにはどうしたらいいかを考え、企画案を作成してみたところ様々なハードルの存在に気が付いた。
特に、運営資金やサポーターの存在、参加者を集める前提の他者とのつながりに関して課題を感じ、理想とのギャップを埋めるべく3つの提言を考えた。

提案

活動する中で感じた障壁
金銭や人とのつながりの面で
自分だけではできないことが
多くある！！

■提案①: 願いの実現に向けて伴走・助言をしてくれるサポーター知識や経験の少ない私たち中高生世代にとって、経験豊富な方々に助言をもらうことは自分たちのプロジェクトの実現につながる。あくまで企画運営の主体は中高生であることを尊重し、支えてくれる大人の存在が大切だと思う。

例えば・・・
「武蔵野市子ども文化・スポーツ・体験団体
支援事業費補助金」申請のためには...
4月 申請 → 6月 プレゼン → 結果通知
2カ月
・時間がかかる
・準備が大変
⇒もっと規模の小さい
イベントが企画しづらい

■提案②: 中高生世代が利用しやすい簡易的な助成金(補助金)制度
私たちが作成した企画案では、会場費やゲストへの謝金など多少の経費が発生してしまうことが分かった。その一方で、考えた企画に利用できそうな現在の補助金制度は、申請から交付に至るまでのプロセスに時間を要し、準備の負担も大きい。金額も含めて規模が小さく、私たち中高生世代が利用しやすい制度作りが必要だと思う。

提言
□ 実現に向けての助言などを行うサポーター
□ 簡易的な中高生世代が利用しやすい助成金
□ 同世代に情報発信を行う媒体となるSNS

■提案③: 同世代(中高生)に向けて情報発信を行う媒体現状、武蔵野市の公的な広報手段は限られている。また、市民に対して中高生が直接呼びかけられる場も決して多くはない。中高生になじみのあるSNSなどの媒体を通じて、市内で活動を行う中高生世代の活動紹介や参加募集情報を発信できれば、より多くの人が集まるきっかけを生み、活動が有意義になるのではないかと。

第2部 | ポスターセッション ※2

自分たちはこう思っていて、大人に対してこういうふうにしてほしいということを伝えたいという大人への要望がありました。それは確かにあるだろうなと思いました。他にも、子どもたちが何か実現をしたいけれどそこに様々なハードルがある場合に、その解決策を大人と一緒に話し合いたいという話がありました。これは意外と大人が食いついてくるかもしれません。なぜなら、大人もやりたいことに対して皆さんの意見が欲しいんです。例えば、市ではYouTubeなど動画での情報発信を行っていますが、どういうふうにみなさんに情報を伝えるのかというアイデアをもらいたいと思っています。そんなギブアンドテイクで、私たちもほしいアイデアがあるし、皆さんがやりたいことに対してアドバイスができる。そんな場を作るということではできるかなと思います。

——— 小美濃市長

市長・教育長の
講評

提案内にあった「子ども文化・スポーツ・体験活動団体支援事業費補助金」の制度は私が担当している部署の事業です。提案からプレゼンテーションまでの2ヶ月間が長いという指摘について、むしろ長いというのは準備ができて良いのではないかと思っていました。しかしその期間が拘束されてしまう、早くアクションをしたいというのが皆さんの願い。少額で良いということを含め、もう少し改善する余地があると切実に感じました。

——— 竹内教育長

来場者のコメントふせんより

- 企画する中高生からこんなに大人に手伝ってほしいと依頼していく形は新しいと思った。
- 悩み相談などは、相談窓口のような形ではなく、交流としてだと気軽にしやすいと思うので、多世代交流の場は大事だと思う(中高生から見て)。
- 中高生が自らやりたいことを補助金を使って実現させたいという提案良かったです。(今までは大人目線でした)
- やりたいことを実現する上で、「人」「お金」「情報伝達」は仕事でもすべてのことに共通の障壁だと改めて気づかされました。
- 大人「が」子どもの権利を知ることが大事!一緒に学びあえる場がほしいという言葉にはっとさせられました。
- 情報にアクセスしてもらうための仕掛けを掘り下げて考えてもらいたいです。(そしてそれを知りたい)
- ムサカツでの出会いを活かしてネットワーク化をしていくと良いかも。

.....
来場者との意見交換より

【質問】「やりたいこと」とは具体的にどんなことですか？

【応答】まずはシンプルに、世間話や悩み相談など多世代で気軽に話してみたい。さらに言うと多世代で社会問題や市の政策について議論してみたり、進路や職業について相談をしてみたいなと思います。

※1 当日の発表原稿をもとに、運営事務局で言葉や説明を補った

※2 最終的な提案に載らなかった声も含めて、ポスターセッション用模造紙のふせん内容を第6章に掲載

第1部 | 全体発表

発表用スライド

市政提案の内容 ※1

FREE&CASUAL

in 武蔵野

～気軽に運動できる場～

グループの願い

FREE & CASUAL

in 武蔵野

説明(背景など)

- 運動できる場（施設）が総合体育館の周辺にしかない！
- スポーツや運動を通してもっと交流したい！

- スポーツが好きな僕らが集まり、新しい制度やモノを作れば武蔵野市は進化・進歩するのではないかとこの夢を話し合ってきた。みんなから出てきた夢以下の願いをまとめた。
- 1つ目は運動できる場がもっと欲しいということ。
- 2つ目はスポーツ・運動を通していろんな人と交流したいということ。

提案

利用料金を改訂したい！

- ・市内施設の無料化
- ・大人料金となる対象の見直し
- ・年間フリーパス等新たな制度の導入

■提案①:利用料金の改訂

プールや体育館などの施設は非常に安い料金で利用できる。しかし、小・中学生から料金が発生してしまうため、高校生までは無料で利用できるようにして欲しい。

5,000円の年パスの導入など新たな制度も導入して欲しい。

利用時間を拡大したい！

- ・中高生が利用できる時間帯の拡大
- ・季節に関係ない統一した利用時間の確保

■提案②:利用時間の拡大 提案③:利便性の追求

中高生は保護者の同伴がないと18時までしか利用することができない。また、屋外施設は利用時間が短くなる季節もある。部活の練習後に利用したい学生も多いため、季節等に関係なく利用時間を延ばして欲しい。

体育館は様々なスポーツを楽しむことができるが、駅から30分近くかかってしまう。駅の近くに新たな施設をつくるだけでなく、無料シャトルバスも導入して欲しい。

利便性を追求したい！

- ・施設までの送迎バスの導入
- ・駅のバス停にわかりやすい案内板の設置
- ・駅の近くや徒歩圏に新たなスポーツ施設をつくる

■提案④:貸し出し道具の充実 提案⑤:環境の整備

スポーツをする時には道具は高額なものもあり、全員が揃えることは難しいため、道具を充実させて欲しい。

トラブルが起きることもある騒音について気にせず運動を楽しめる場が欲しい。

最近は、学校でもタブレット端末が利用されている。学校外のスポーツをする場でもWi-Fi環境を整備し、デジタル機器が使えるようにして欲しい。

道具を充実させたい！

- ・貸し出しできる道具の充実

環境を整備したい！

- ・騒音を気にせずスポーツを楽しめる場の確保
- ・デジタル機材を活用するためのWi-Fi環境

第2部 | ポスターセッション ※2

武蔵野市は小さな市です。だから場所の確保は本当に難しく、ここが一番頭を悩ませました。一つの解決策は、学校の有効利用です。あと面白かったのは総合体育館の年間フリーパスを5000円でというアイデアです。武蔵野市には50年ぐらい前から夏の市民プールの利用料は小中学生10円というような子ども達に対して思いっきり遊んでもらおうという文化があります。そのため、こういったフリーパスの様なアイデアは意外といけるかもしれません。また、体育館の予約がいっぱいで中高生の優先枠を作れないかという要望もありました。考え方によっては何曜日の何時からみたいな形であれば、もしかしたらできるかもしれません。なかなか面白いかなと思いました。スポーツ振興は、武蔵野市全体の政策でもあるので、いただいたアイデアも参考にして、皆さんが利用できやすいように、一歩でも近づけるようにできたらいいなと感じました。

——— 小美濃市長

市長・教育長の
講評

総合体育館や学校の部活動など、みなさんにとって身近にスポーツができる空間、場があるのではないかと思っていました。お話を伺う中で、普段会わない、例えば違う中学校の人たちと練習をしたり、それを通じてそれまでとは違う仲間と自然に繋がることができる、そういう交流の場もほしいという希望なんだと感じられました。中高生にとって、物理的な距離というハードルは高いのだということがお話を伺って改めて思いました。

——— 竹内教育長

来場者のコメントふせんより

- ・ たしかに近所の公園でスポーツできる場所はほぼない。近さ、時間帯、料金、それぞれの面でスポーツ施設の使いにくさを感じていることを初めて知った。
- ・ 学校などは部活で使っているなどで利用には制限があると気づいた。
- ・ 送迎バスは、中高生だけでなく高齢者にもいいかも。
- ・ いろいろなアイデア good! 利便性や道具(体育館)
- ・ 年パスの制度はとても良い。
- ・ 総合体育館の中に年少者優先の時間帯を設けるのは案として出していた。(小学生と中高生の利用時間を分ける)

来場者との意見交換より

【質問】施設のフリーパスはいいなと思いました。

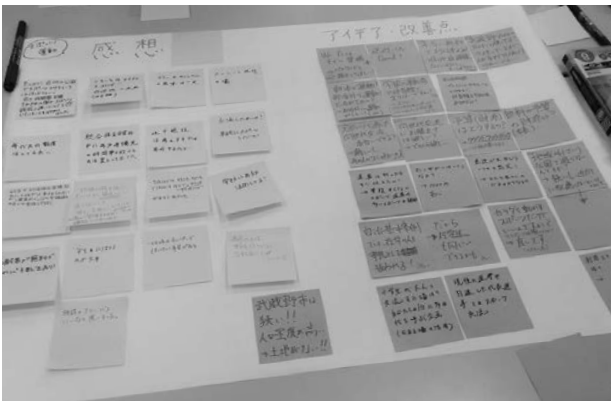
【応答】5000円は保護者に払ってもらうことを想定。ICカードをタッチすると誰が道具を使っているかわかるのも良いかもしれない。「プレミアム」・「スタンダード」みたいに、料金設定のパターンをいくつか用意する。プレミアムには道具の貸し出してもらって権利を付けてもいいかも。

※1 当日の発表原稿をもとに、運営事務局で言葉や説明を補った

※2 最終的な提案に載らなかった声も含めて、ポスターセッション用模造紙のふせん内容を第6章に掲載



第4章 事業の実施結果と 振り返り



1. 事業の実施結果:市の施策等への意見反映に向けたポイントの整理

「市政提案会」における4つのグループの全体発表およびポスターセッションでの意見交換を踏まえ、事業を通して聴きとった中高生世代の声を市の施策づくり等へ反映していくために重要だと考えられるポイントを以下の4点にまとめた。

① 「中高生世代」対象の取り組みの必要性

「中高生(同)世代交流ができる場」(以下、「同世代交流ができる場」)グループの提案に対しての以下の市長講評は、「中高生世代」を対象とした本事業の重要性をあらためて示している。

「まず一つの気づきとしては『子ども』を一括りで考えないでほしいという話です。何か取り組みを行う際に中高生は一緒にできるかもしれないが、小学生はなかなかまだ入れないという話がありました。そこに年代別のハードルがあったのかと思いました。」

中高生世代は、小学生世代とは発達段階や生活圏、行動範囲が異なることから、「子ども施策」という大きな視点だけでなく、「中高生」という世代に着目して生活課題を把握し、施策づくりにつなげていく必要があると考えられる。また、ワークショップを通して見えてきたのは、「中学生」と「高校生」でも生活課題が異なるということである。「多世代交流ができる場」という小テーマを選んだ参加者は高校生年代が多かったが、その背景には「進路や将来のことを考えたい、大人に相談したい」という願いが多く聞かれた。今後は、子どもから大人への「移行期」としての高校生年代独自の生活課題やニーズにも着目する必要があるかもしれない。

② 具体的な要望に対する検討とフィードバック

市政提案の中には、個々の事業や施設運営に対する具体的な要望も多く含まれている。以下は、市長および教育長の講評やポスターセッションでの意見交換において、特に言及されていた提案である。背景にある中高生世代の願いも踏まえ、今後どのような検討がなされたのか等を適切にフィードバックしていくことが必要になるだろう。

<具体的な提案(抜粋)>

- ・ 公共施設(特に武蔵野プレイス)を水曜日の午後に利用できるようにしてほしい。
- ・ ムサカツのようなワークショップで、話しあうテーマを自分たちで決めたい。
- ・ 「武蔵野市子ども文化・スポーツ・体験支援事業費補助金」について、申請期間をより短く、また金額も少額で簡易的なものにしてほしい。
- ・ 体育施設等の年間フリーパスの導入。
- ・ 体育施設等における「中高生(優先)枠」の導入。
- ・ 体育施設等までの送迎バスの導入。
- ・ 高校生の利用料金の軽減。

③ 「自分たちでやりたい」という願いを実現するための仕組みづくり

「同世代交流ができる場」と「多世代交流ができる場」のグループに共通していたのは、そのような交流の機会を「自分たちで企画してみたい」という想いである。「多世代交流ができる場」では、第5回のワークで企画書を作成し、自分たち主体でやりたいことを実現する際に、①助言などを行うサポーター、②利用しやすい助成金、③同世代に情報を発信する媒体、が必要であると提言

にまとめた。第6回のポスターセッションでは、①の「サポーター」について、Teens ムサカツの過去の修了生や事業に協力いただいた地域の方々をつなぐネットワークのようなものを今後つくっていけないかというアイデアも生まれた。その際、中高生世代に関わる「大人」との関係性について、「対等に」「フラットに」などのキーワードが出たが、中高生世代の主体的な活動を伴走的に支える「大人」には、ファシリテーションに関する一定の心構えや姿勢、技量等も必要とされるだろう。また、企画のサポート役としてだけでなく、「家族でも先生でもない大人だからこそ、親しい人には相談しづらい悩みを相談できたり、将来の進路選択につながる話を聞けたりする」という意見も出ていた。

④ 学校やコミュニティセンターなど既存の施設の利活用と情報発信

「同世代交流ができる場」や「運動・スポーツができる場」の提案の背景には、友だちと気軽に集まれる場や体育施設等が「近くにはない(中高生世代にとっての生活圏にない)」という課題意識がある。他にも、「武蔵野プレイス B 2 フロアは人が多すぎて使いづらい」「武蔵野プレイスでできるようなこと(特に B 2 青少年フロア)が、吉祥寺エリアや中央エリアなどにもほしいというのはとても共感できる」などの声があがった。

ただ一方で、「武蔵野市の人口密度は日本で二番目に高い」という市長の発言にあるように、施設を設置する場所の確保には難しさもあることから、当日のポスターセッションでは、学校施設の有効活用や各地域のコミュニティセンターの活用について意見交換がなされた。また、「同世代交流ができる場」グループは、フィールドワークで武蔵野プレイスと境南コミュニティセンターを見学したことから、「『そんな場所知らなかった』

をなくす!」という提案をしているが、中高生世代の居場所を増やしていくとともに、既存の場につなげていくための情報発信の課題についても声があがった。

2. 参加者にとっての「Teens ムサカツ」事業

参加した中高生世代にとって今年度の Teens ムサカツがどのような意味があったのか、最終回に書いてもらった「Teens ムサカツ振り返りレポート」から一部コメントを抜粋する。報告書等へのコメントの記載を承諾した参加者のレポートの一部を抜粋し、運営事務局で項目立てをして以下のように整理した。

<自分の想いを伝えること>

- ・まず自分に自信がついた。大人に自分から色々説明していくうちに会話の中で補足が生まれて、さらに深く追求していくことができた。期待とほぼ同じで、しっかり市長や教育長にお会いして意見を伝えることができた。やり残したこととしては、市長やその他の大人の方々と話す時間が少し短すぎたと感じた。1回話ただけで自分の伝えたいことをすべていえるわけではない。
- ・普段中学生や大学生の人と話をすることがあまりないので、年齢層が広くて新鮮でした。
- ・ムサカツの、中高生主体で活動するという企画性に最初はすごく驚いたのですが、普段あまり表に意見を出さない私でも気軽に発言することができ、成長を感じられました。

<他者と協同すること>

- ・自分1人で考えるのと違って、みんなと話しているとどんどんアイデアが生まれていって、いろんな視点から物事を考えられてとてもおも

しろかったです。

- グループCは皆色々な意味で個性豊かで、笑いながら作業ができたのでとても楽しかった。これからもちょくちょく会いたいと思った。
- 回を重ねていく内に交流する人も増えている。いろいろな見方を知る事ができ、今回の課題の自分達なりの策を最後には市長さん達に伝えられて良かったです。

<コミュニティを広げること、交流を広げること>

- 僕自身が中高と市外の学校に通学していることもあり、市内のコミュニティが閉ざされていたため、同世代の学校外の方々と話す機会はとても貴重なものとなった。また、こういった場でないと話しづらい踏み込んだ話ができる。
- 今回ムサカツで経験したことが、自分が求めている「同世代交流の場」と「多世代交流の場」なのだと感じ、あらためて、それらの「場」の大切さと有効性について痛感することができました。
- ムサカツに期待していたこととその結果、期待と結果のギャップはあったか？→経験を積む、同世代と交流する(期待)／他世代との交流(結果)
- 同世代の子たちと話すことは、学校外のコミュニティを広げてくれて学校ごとの違いを知ることにつながりました。

<市政について考えること・参加すること>

- 今まで「子どもの権利」など、分野ごとに考えることはありましたが、「市全体」「全世代」で考えるのは初めてで面白かったです。
- ムサカツに参加することで、市がどんなことを中高生に聞きたいのかや周りの中高生が普段どんなことを考えているのかが知れた他、市

政に関わるきっかけにもなった。

- 市の大人とプレゼン&意見交換する場合は、初め緊張していましたが、想像以上に中高生世代の意見・アイデアを求めてくださっていること、前向きに検討して、具体的な方法を一緒に模索してくださったことが分かり、市にアイデアを言うてみることの大切さを学びました！
- 自分が市政に関わってみて、市も子供の意見を求めていることが新しい発見だった。

3.事業の振り返りと次年度に向けた検討事項

最終回に「総まとめ振り返りアンケート」(以下、「アンケート」)を無記名で実施した。欠席者にはオンラインフォームで回答を依頼し、26名の全参加者のうち20名が回答した。「全6回の満足度」(n=20)については、「満足」が65%(13名)、「どちらかといえば満足」が30%(6名)、「どちらかといえば不満」が5%(1名)であった。

事業を実施する上で重視したポイント(第1章参照)にそって、事業の振り返りと次年度に向けた検討事項を以下の4点に整理した。

①「武蔵野市子どもの権利条例」をふまえたテーマ設定

今年度は、令和5年4月に施行された「武蔵野市子どもの権利条例」を踏まえ、「居場所」に関する中高生世代の声を聴きとることをねらいとした。そこで、事前に運営事務局で年間テーマ『「こんな場があったらいいな」を市政に』を設定して、初回に参加者に提示した。その後、第1回および第2回のワークを進める中で、参加者から出てきたキーワードをもとに、6つの小テーマ(勉強できる場、室内でゆっくり過ごせる場、スポーツ・運動ができる場、同世代交流の場、多世代交流

の場、進路を考える場)を設定した。第3回の際に、参加者に関心のある小テーマを選んでもらい、それぞれの問題意識を出しあうことでグループを編成したが、参加者が7名しかおらず、人数の関係で3グループしか構成できなかったことで、その後の話し合いの話題は限定されてしまった面がある。

アンケートでは、「テーマ設定について」の質問項目(n=20, 複数回答可)について、「考えてみたいテーマだった」が90%(18名)、「テーマから自分たちで考えてみたかった」が30%(6名)だった。「同世代交流ができる場」グループの提案に、「ムサカツのような場でも、話し合うテーマ自分たちで決めたい」とあるように、テーマから一緒に考えていくことで、当事者たちが話したい話題、切実なテーマについて扱うことができるようになるだろう。一方で、運営側で一定程度テーマを絞ることで、出てきた声を市の施策に反映しやすくなるという点もある。来年度以降のテーマを決めるプロセスについては、それらの点を考慮したうえで検討が必要である。

②安心・安全な話し合いの場づくり

今年度は、参加者が自分の感じていることを安心して表明できるような場をつくるために、小グループによる活動をベースに、参加者相互の関係づくり・集団づくりを重視した。そのために、固定の参加者で全6回のワークショップに取り組み、回を重ねるごとにしだいに関係性を深め、議論を深めていけるような形式をとった。また、各グループに中高生世代と年齢の近いグループファシリテーターを複数配置し、参加者どうしがお互いに知りあえるような関係づくりとともに、参加者一人一人の様子を丁寧にふまえながら、各ワークの進め方を柔軟に工夫した。

アンケートでは、「安心してワークや議論に参

加できましたか」の質問項目で(n=20)、「安心して参加できた」が80%(16名)、「普通」が15%(3名)、「安心感を持つことができなかった」が5%(1名)という回答だった。また、「グループファシリテーターの存在は議論やワークの助けになりましたか」の質問項目では(n=20)、「とてもあてはまる」および「どちらかといえばあてはまる」が95%(19名)だった。それらの理由としては、「ワーク時間だけでなく休憩時間にも積極的に話しかけてくれたことで、話しやすい関係を構築してくれたから」「自分では、少し難しい所も優しく声を掛けてくれて回答ではなくその過程を教えてくれるところ」「自分たちの話し合いが止まった時に助言をしてくれた」「みんなの自己主張をまとめてくれる。道をはみ出しすぎないようにセーブしてくれるから話し合いがスムーズに進められた」などが挙げられている。

これらの回答から、グループファシリテーターの存在は非常に大きく、参加者一人一人と関係性を築きながら、安心して話し合いに参加できるような環境づくりができたといえるだろう。ただ、継続して参加できたメンバーが少なく、毎回初対面のメンバーがいるような状況であった。

参加が安定しなかったことにはいくつかの要因が考えられる。一つは、広報面である。今年度は募集時点で全6回の日程を告知できていなかったことで、「単発企画」のように認識していた参加者もいたことから、次年度は募集時点で年間予定を示す必要があるだろう。二つ目に、欠席者が最も多かった第3回(10月22日実施)については、学校のテスト期間や学校行事などが重なったことも背景にある。アンケートの「各回の間隔/期間について」の項目では、夏休みなど長期休み中の「集中型」を希望する声も多くあがったが、時期や日程についての検討も必要である。三つ目に、そのような忙しい日常の中でも継続して参加しようと思う動機の一つは、「たのしさ」や

「仲良くなった同世代がいること」だと考えられるため、ワークショップの序盤(第1回や第2回)に、テーマに触れながらも参加者相互の「関係性づくり」に比重を置く必要があったと考える。アンケートにおいても、今後に向けた項目の中で、「参加者同士がもっと交流できる機会がほしい」という回答が多く寄せられたことから、次年度はワークを進める中で参加者同士がつながれるような工夫をしていくことが求められる。

③「自分たちの声によって何かが変わる」という体験を通して自己効力感を高めていくこと

アンケートの「自分自身の市政やまちづくりに関する意識の変化について」の質問項目では(n=20、複数回答可)、「以前より身近に感じられるようになった」が85%(17名)、「自らの意見を伝えること、行動してみることにプラスの可能性を感じた」が60%(12名)だった。

前掲の参加者による「振り返りレポート」からは、市政提案会のポスターセッションの際に、市長・教育長をはじめ、各課の職員の方々と直接意見交換ができたことで、自分の声が大事にされることを実感できたと感じている参加者が多いことがうかがえる。また、全6回のワークショップを通して、参加者がお互いの意見を聞き、ほかの人の考えに気づきを得たり、お互いの考えを大切にしたりする経験もできたのではないかと考える。ただ、「自分たちの声でなにかが変わる」という体験につながるかどうかは、今回の最終提案について、今後どのような検討がなされたのか等を適切にフィードバックしていくことも重要であり、継続的な取り組みも必要である。次年度は、今年度修了生を対象とした「ムサカツ同窓会(仮)」を予定しており、完成した報告書の内容を共有するとともに、そのような提案に対してのフィードバックを行う機会としても活用し

たい。

④「声を聴かれにくい子ども・若者」の声を取り入れる工夫

ワークショップを進める上で、自分たちの提案等を他者の視点に立って多角的に検討するためには、さまざまな背景の中で生きる同世代の「多様な声」に出会うことも重要であると考え。今年度は、ムサカツ参加者以外の中高生世代の声を間接的にワークショップの議論に取り入れていくために、「同世代交流の場」グループで武蔵野プレイス利用アンケートを実施した。しかし、十分な数の声を拾うことはできず、またその回答結果を提案に活かすことができなかった。次年度以降もムサカツ事業におけるアンケート実施等、ワークショップに多様な声を取り入れる工夫は模索していきたい。



第5章 人材育成



ファシリテーターの研修体制について

第1章の「運営体制」に記載の通り、本事業の実施にあたりグループファシリテーターとして実施団体職員2名を含む計12名配置した。参加者と年齢の近いスタッフが話し合いのサポート役を担うことで、参加者との関係づくりや意見を言いやすい雰囲気をつくることを期待したため、ファシリテーション経験の有無を問わず、30歳以下の方を募集

した。

上記の通り、ファシリテーション経験の有無を問わない募集形態であったため大半の大学生にファシリテーションの経験が無い状態であった。子ども主体、あくまで参加者の意見表明を尊重することに重きを置く事業の性格を踏まえ、以下2回の研修をグループファシリテーター向けに実施した。

ファシリテーター研修

第1回

Teensムサカツ ファシリテーター研修

日時 2023年10月15日

講師 山本晃史氏(NPO法人わかもののみち)

実施目的

- ・現在の社会情勢を踏まえて、子ども・若者の意見表明や社会参画の意義について知る。
- ・ユース(子ども・若者)の伴走者(ファシリテーター)としてのマインドとスキルを学ぶ。

実施内容

座学

- ・「伴走者(ファシリテーター)としての心構え(基本姿勢)を学ぶ」
- ・「なぜ、子ども・若者の参画が必要なのか？」

ワーク

- ・「企画案をもとに、より参加のしやすさや充実度の高いプログラム設計を考える」
- ・「適切な関わり方を考える。様々な場面における関わり方をケース検討する」

第2回

デザイン思考実習:居場所づくり ぼんやり→フックリ作戦会議

日時 2024年2月22日

講師 筒井一郎氏(ヌールエデザイン総合研究所)

実施目的

- ・「居場所」という抽象的な概念を1人1人のとらえ方で言語化する。
- ・子どもの目線に立ち、「今必要な居場所とは？」という視点で提案をつくるプロセスを実際に体験する。

実施内容

ワーク

- ・自分にとって「居場所」とは？
- ##### ディスカッション
- ・多様な他者あるいは条件を受け入れながら、共存する方法について考える
- ##### 提案作成
- ・これからの未来を見据えて自分(中高生視点)の必要(大切)な居場所とは？

その他、

- ・複数配置によるフォロー体制づくり
 - ・団体職員をメンターとして、必要に応じてアドバイス、サポートの実施
 - ・段階的な役割の拡充による負担軽減
- によって、8か月間の長期的な参加に無理がないように適宜調整を行った。

また、実施団体の基本方針として事前ミーティング及び事後のふりかえりを大切な研修の機会と捉えている。事前ミーティングにおける各回の目的やワーク内容の理解と疑問点の整理による主体的な参加の促進、事後のふりかえりにおいては、「安心・安全な話し合いの場」をつくることを一義としながら、子どもたちとどのような関わりが必要か、ファシリテーターとして大事な視点の検討・共有を行った。

グループファシリテーター 振り返り

今回のムサカツにおける1番の収穫は、中高生が普段の生活で何を感じているのかを知ることができたことだ。特に印象に残っているのが、「距離」に関する話である。中高生にとって1駅分の距離がいかに遠いのかを思い知るような話が幾度も話題に上がった。たしかに、私自身が中高生だった頃を思い返すと、今とは異なる感覚を持っていた。年を重ねるにつれて薄れていった感覚を思い出し、他者の視点に立つことの重要性を改めて感じさせられるいい機会となった。一方で限られた時間の中で、中高生たちの声を提案というかたちにまとめることの難しさを感じた。今回のムサカツは開催が6回と決まっており、その中で中高生の考えを聞いたり、それをもとにフィールドワークを実施したりするなど、1回1回の内容が非常に濃かつ

た。しかし、ムサカツ自体は1、2ヶ月に1回程度の開催頻度であり、中高生自身が前回のムサカツで何を考えたのか、どういった発言をしていたのかを忘れてしまうこともあった。さらに、中学生と高校生では自らが持つ意見を言葉にすることのハードルに違いがあり、アウトプットの質をそろえることが難しかった。中高生の声を大人に届けるためにも、これらの反省を次回に活かしたい。

(一橋大学大学院)

ファシリテーターとして活動に参加して嬉しかったことは、やはり中高生が中高生自身で市政への提案を考えて発表するというに携われたことです。ただ自分たちに都合がよい提案をするのではなく、誰もが過ごしやすい・暮らしやすい武蔵野市を作るために何が出来るかを中高生のみならず深く考えていました。ムサカツの活動を通じて、武蔵野市をより良くするためにはどうすれば良いかを考え・議論する中高生たちの姿は、とても尊いものでした。その姿をファシリテーターとして見られたことがとても嬉しかったです。

ファシリテーターをやった難しかったのは、ファシリテーターとしての立ち回りです。会社とは異なるファシリテーターを初めて担当したので、とても苦勞しました。ファシリテーターとして自分が発言することで、中高生の発言の機会を奪っていないか、考えの邪魔をしていないかと常に考えながらやっていました。

それに加えて、私はまだ大学1年で19歳です。年が1つ2つしか離れていない参加者の子もいる中で、私が話をリードする立場にいてよいのかという悩みをずっともっていました。未だに自分のファシリテーターとしての関わり方が良いものであったかどうかわかりません。良かったことと反省点を述べてきましたが、私自身もムサカツを通じて学んだことはいくつもあります。

本当にムサカツに携われて良かったと思うばかりです。
(成蹊大学)

各回の事前ミーティングや反省会などを通して、1回の活動に対して綿密にスタッフやサブファシリテーターの皆さんとやりとりをできて、とても充実感がありました。特にアイスブレイクについては、色々と意見を出させていただいたり、進行も任せていただけて嬉しかったですし、進行担当だった第2回のときは盛り上がり過ぎて良かったなど安心しています。活動本番の時は、緊張しているような子や発言の少ない子への声掛けを目標にしており、それは実行できたと感じています。特に第6回のポスターセッションでは、市の参加者の中でも子どもたちに声をかけるのをためらっている方もいたので、その方々に話をふり、子どもたちとのディスカッションにつなげることができたかなと思います。途中、就活や体調不良により参加できないことも多かったため、肝心の提言に至るまでの過程(第4回、第5回)にあまり関われなかったことが残念です。子どもたちの方も定期テストなどで欠席者が続出する回もあり、仕方ないこととはいえ、もう少しモチベーションを維持させられるように頑張りたいところが反省点です。ただ、第6回は想像以上に子どもたちも市長や教育長からの質問に臆することなく、むしろ自分たちの言葉でアピールできる場に喜んでいたのが印象的でした。そのため、第1~3回でももう少し提言に向けたワクワクを感じてもらえるよう、後半の提言を意識できるような声掛けが出来たらよかったです。

(青山学院大学)

| 項目 | ふせんの内容 | |
|------------------------------|---|--|
| 施設の利用にあたってのハードル | <ul style="list-style-type: none"> ・ 中高生向けの利用時間枠をつくる ・ 武蔵野プレイスの休館日が水曜日や休日じゃないといいな ・ 高速wifiがほしい! ・ 武蔵野プレイスのB2フロアは、騒がしすぎるときも。入りづらさもある。 ・ いろんなやりたいことを持った人が同じ場所でどう過ごすか(遊びと勉強で分ける?) ・ 騒がしくても怒られない場所がほしい。ワイワイしたい! ・ コミセンの部屋の予約手続きを簡略化してほしい。「〇〇週間前」というのは時期が早すぎる…(ネット予約や空き状況を確認できたり、当日予約ができたりするとよい) ・ 脱「肩身の狭い中高生」。コミセンは、中高生が積極的に使える雰囲気じゃない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 小学生の時にコミセンに行っていた。受付の人に怒られたけど、気をつけて使っていた。 ・ バンドのスタジオは一般の場所はお金が高いので、防音室があるといい ・ グループで使える部屋(活動のミーティングなど)があるといい ・ 高校生も遊ぶ! 高校生の「遊び場」があるといい ・ コミセンの一室を「遊び場」として開放する ・ 施設じゃなくても、野外のイベントスペースなどがあれば中高生の「遊び場」になる。(今の「遊び場」はゲームセンターカラウンドワンに限られる。 |
| 同世代交流についての願い | <ul style="list-style-type: none"> ・ 趣味の合う人と関わりたい ・ 同世代なら知らない人でも話しやすい ・ つながりを増やしたい。何かのきっかけで仲良くなれる。 ・ 学校の他学年の人たちともっと関わりたい ・ 同世代とつながれる、話ができる場に興味がある | <ul style="list-style-type: none"> ・ 気をつかわない同世代の仲間がほしい ・ 人とたくさん話したい(ムサカツを通して話せるようになった) ・ 幼稚園時代の連絡をとりあっていない友達と再会したい |
| ムサカツの参加動機(学校外の場へのニーズ) | <ul style="list-style-type: none"> ・ ムサカツみたいな交流の場がほしい。 ・ 課題に対してみんなで話し合いたい!(興味合う人と話したい、集まりたい) ・ この時期(高校や大学)にできることを精一杯やりたい。そのツールの一つが学校外の交流。 ・ 中高一貫だと考える方向がまとまってくる感じがある ・ ムサカツのように発表したり話すの楽しい。学校だとふざけちゃう。「意識高い系」などと言われ、本当に思ったことを言いづらい。 ・ 学校だと「本気でやる」ような場がない。大人にはプレゼンがどう伝わるのか? | <ul style="list-style-type: none"> リアルな場がほしい。 ・ 去年のムサカツは、ブレインストーミングなどみんなでアイデアを出して、相談して、みたいのが楽しかった。 ・ 今年のムサカツは、6回シリーズで毎回メンバーが変わらないので、知った顔で続けられるのがいい ・ 学校の他の人は部活などで忙しいから、ムサカツのような企画の参加は難しい(そもそもそのような学校外の企画に目が向いていないかも) ・ ムサカツでは知っていることを増やしたい |

| 項目 | ふせんの内容 | |
|---------------------|--|---|
| 自分たちでの 企画づくり | <ul style="list-style-type: none"> 自分たちで何かを企画して実行したい 0からの企画づくり 自分たちで一から全部立ち上げたい! 中学生ならではの視点を活用 | <ul style="list-style-type: none"> 学校外で本気で取り組める企画、何か がほしい ムサカツみたいな交流の場がほしい |
| 中高生が使える場所の 普及・認知 | <ul style="list-style-type: none"> どうしたら多くの人に知ってもらえ る?まずは「認知」が必要。その上で、 行くか行かないかがある。 コミセンの年齢層が「乳幼児親子」か 「高齢者」で、もう少し中学生にも使っ | <ul style="list-style-type: none"> てもらいたい 興味を引く広告などで伝える 中高生がそのような場所について「布 教」する |

来場者からのコメント 模造紙

感想

- 同世代で遊んだり、勉強し合ったりできる場が必要ながよく伝わりました。
- 武蔵野プレイスでできるようなこと(特にB2の青少年フロア)が、吉祥寺エリアや中央エリアなど、もっと数がほしいというのはとても共感できる。
- 「主催」するという積極的なところがすごい!
- 中高生が主体になることは良いと思います。大人では出ないアイデアが出ることを期待します。
- 0から企画するのは、その過程で仲も深まるので良いと思った。
- たくさんの方が使えるスペースと時間制限なく使えるスペースの両立・・・!
- 中高生向けに同世代が情報発信するアイデア良いと思います!
- 高校生やいろいろな人たちとワークショップを通じて関わってよいと思う。
- 自分たちが中心にという発想はよい。考えたことが実現につながるための手法をどうするか課題。
- このような武蔵野プレイスは本当に便利で、勉強もはかどるので、このような施設が増えればいいなー
- 中高生のための企画を中高生が0から考えるというのがいいと思った。
- これをきっかけにぜひ中高生企画のイベントを実現してほしい!
- 市にどのような施設や団体があるのかをより知ってもらえると可能性が広がると思いました。

アイデア・改善点

- 若者世代が「場」を必要としていることはよく認識できた。具体的な提案として、場所や方法もあればなお良い。
- 幼稚園や小学校が同じだった人たちと集まれるイベントを開催してほしい。
- 自分たちのアクションをどこにつなげていくの?
- 大人の関与のイメージは?サポーター?
- 具体的にどのようなことを市はすればよい?
- ただ「中高生集まって」だけだと想像しづらいけど、このイベントをするので準備から手伝ってもらえませんか?だと考えやすい。
- モヤッとプレイスは、中高生だけでなくファシリテーターがいるけど、イメージに近いものはある。
- すぐには友人にはなれない。→数回に分けて計画的にファシリテート
- 自由にテーマを選んで話せる場(ex もやっとプレイス)で話す。同じところで繰り返しかえし会うと親しくなっていく。
- 待ち合わせができる場所づくり
- 中高生のために、水曜午後に利用できる施設を!
- 中高生もコミセンのスタッフに遊びに行く感じで利用できるとよい
- 境南コミセンの魅力を中高生に知ってもらえるとよい。
- 来年度のムサカツのテーマ決めも中高生主導でできないか?と考えました。

| 項目 | ふせんの内容 | |
|---------------------|---|---|
| <p>こんな場がほしい</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 移動する空間(キッチンカー) ・ 正面に座ると緊張するから横に座って話してみたい ・ 駅チカ ・ 小さい子やペットもいる場所(まだ素直な年齢、3～4歳くらいまで)。リラックスできるから。 ・ 同じ趣味の人と会いたい ・ 世間話！友達とは話しにくいことをフラットに話したい。 ・ 違うこと(レクリエーションやプロジェクト)をしながら、他の世代の生活を聞く | <ul style="list-style-type: none"> ・ 大人の人生について聞ける場所。一つ一つの選択で人生が変わると思うと後悔しがちだから。 ・ 和室だと机を挟まないいで、距離感が近くなれる ・ 調理を通じたコミュニケーション、参加型食堂。月一回。 ・ せっかくなら普段話せない人と話して刺激を受けたい ・ 勉強の合間に話せるところ ・ 敬語禁止 |
| <p>大人との関係性について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 家族や先生に沿うんだんしづらいことも相談したい ・ お金や運営のサポートなど、中高生でできないことを手伝ってくれる関係性 ・ 否定しないで、良いところを伸ばす環境や運営 ・ 受け身だけでなく自分からもいける対等な関係 ・ たまたま「休日に出会った先生」と話すようなことを話せる関係性？ ・ 大学生や70歳以上の人と一緒に(現役の社会人は疲れている人が多いから。学校の先生とか) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全管理やケンカの対応は必要 ・ 見ず知らずの人には話しかけられない ・ 人による、距離感大切 ・ 子どもが、サポート役の大人を選んで「採用」 ・ イアンさん(今年度のムサカツ第2回の特別講師)に来て欲しい。気軽そう。 ・ 子どもの発想力×おとなの財力=最強 ・ 資金はクラウドファンディングで |
| <p>同世代へのアプローチ方法</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しいこと、面白いことは共有したくなるから、そんな発信をしてみたい ・ みんながみんな積極的にいけるわけではない。 ・ SNSだと興味のある情報しか出てこない。 ・ リアルに足を運ぶのは大変なので、zoomを活用 ・ 「見る専」(見るだけ)OKにしてみる | |

来場者からのコメント模造紙

感想

- たしかに料理したり食べたりできると参加の敷居が低くていいなと思った。
- 「他」世代との交流を創ろうという気持ちはすばらしい。ぜひ具体化してほしいです。
- SNSの利活用はどの世代でも課題であるなと思いました。
- コミセンの利用がしにくい点があることは市の課題と思いました。
- 50人という規模感がいいなと思いました。
- 親や先生では話づらいこともある。だからこそ、多世代で交流する場の必要性を求めていると感じました。
- 顔見知りになれる頻度ということで、月一回と設定していたのが、なるほどと思いました。
- 「食堂で一緒につくる」といった、多世代が対等に話し合えるという企画はすごくいいと思う。(大人も子どもも話す側にも聞く側にもなる)
- 大人にとってのメリットがあるのもgood!
- 提案が非常に具体的でプレゼンも上手だった。
- 実現の可能性も十分に感じた。
- 子どもからの徴収金は高すぎず。
- 具体的な企画ですぐ実現できそう。
- 食べ物は、逆に市が運営するからこそその難しさ(安全性)はあるかもしれないが、一番具体案が分かりやすかったので、実現がしやすいそうだと思います。
- 「あえて会場をいろんな場所にする」→いろんな人が来るきっかけになるアイデアナイス!
- 食事だとそれでもいろんな文化の食事にふれられるので、異文化との交流の機会にもなりそう。
- はじめは小規模から始めるといいと思った。(だんだん広めていく)

アイデア・改善点

- 最初の広報をどうするのか、大人をどう巻き込んでいくのかを詰めると実現性があると思った。
- 場所を借りるための工夫が必要(東⇄西とか、定期的に借りられるとか)
- 中高生以上の年代の方が参加するメリットは?
- 大人が料理できるから口出ししてしまうかも。
- コンセプトが大きいと感じた。50人、みんなで作る、関係性の構築、クラファン、一つ一つハードルを超えて。
- 安全面をどう考慮するかが大切だと思います。大人が不特定に入ることの危険性をどうとらえるか。
- 衛生面の担保をどのようにするのが少し心配だと思ったが、アイデアはおもしろいと思いました!
- コミセンの調理場や学校の調理場を利用してはどうか?
- 定期的な炊き出しは防災にもつながるかも。
- ワンコインだと参加しやすいかも。

| 項目 | ふせんの内容 | |
|---------------------|--|---|
| <p>こんな場がほしい</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 社会人になる上で身につけておくということが知りたい! • 将来について相談をしたい。進路に困っている。 • 多世代の人と社会問題や市のことについて話したい • さまざまな立場、職業の人と話したい! • 市の政策について意見交換をしてみたい! • 職業を選ぶときに良かったと思うことを聞きたい! 進路選択について • 大人の経験談等のお話を聞ける場がほしい • 大人に純粋に話を聞いてほしい! • 悩み相談できる場がほしい • 多世代で楽しめるイベントがたくさんほしい! • 先生以外の大人と話したい • 自分のことをあまり知らない人と話したい • 大人と話すことで、アイデアに現実味が増し、実現に一步近づくかもしれない。 | <ul style="list-style-type: none"> • 第3の場(自分のことを詳しく知らない人と話す場)がいい。安心。気楽。親や友達には話づらい悩みがあるから。 • ムサカツを通して、少し年代の違う人と市の政策(あったらいいものなど)について深く話し合うのが新鮮で楽しかった。 • 定期的に、多世代で社会問題や市の政策について話し合うワークショップを行いたい! • あらかじめ話すテーマは決めておく • 安心して交流できる環境がいい • 施設は交通アクセスの良いところが! 中央図書館は駅から遠い • 広い開かれた施設がほしい • 好きなタイミングで抜けられるのがいい • 個人情報をおまわり取られない |
| <p>大人との関係性について</p> | <ul style="list-style-type: none"> • 多世代交流の場の運営も多世代で行いたい • 大人にとっても意見交換の場 • 世代ごとに壁をつくるのではなく、親しく話せるようになりたい! • 大人とも対等に意見を交換したり、議論したい • 大人だけで運営している場だと子どもはなかなか参加しにくい。運営が多世代だとより広い世代の人が参加できる。 | <ul style="list-style-type: none"> • 大人が子どもの意見をあまり聞いてくれない気がする。 • あだ名で呼んでタメ口で話したい • 居場所の運営は子どもも大人も同じくらいの人数! • 子どもが大人に対して面接する • 会員証を作る(メンバー証明になるもの) |
| <p>同世代へのアプローチ方法</p> | <ul style="list-style-type: none"> • あくまで子ども主体の交流の場 • リアルだけでなくオンラインでも交流できる場がほしい • 消極的で普段あまり主張しないような人も気軽に話せるようにしたい! クラスでも何かを決めるときに、あまり意見しない人の声にも耳を傾けないと、意見する人たちの策に偏ってしまいそうで怖いと思ったことがあるから。 | <ul style="list-style-type: none"> • 多世代交流に興味のない人もつい来たくなる、楽しめるように • 「一見さんお断り」の雰囲気嫌だ • サイレントマジョリティーを取り込みたい • ルールをわかりやすく提示してほしい • 中高生の活動や情報を知れるSNS(インスタなど) |

来場者からのコメント模造紙

感想

- 企画する中高生からこんなに大人に手伝ってほしいと依頼していく形は新しいと思った。
- 交流する場はどのくらいの規模を考えているのか？
- 悩み相談などは、相談窓口のような形ではなく、交流としてだと気軽にしやすいと思うので、多世代交流の場は大事だと思う(中高生から見て)。
- やりたいことを実現する上で、「人」「お金」「情報伝達」は仕事でもすべてのことに共通の障壁だと改めて気づかされました。
- 話の進め方によっては実現可能な提案だと思えます。
- 大学生を呼ぶとあったが、他にどんなことをやってみたいですか？
- 情報伝達が重要だと思うが、どのように情報をしてもらったらいいですか？
- 大人「が」子どもの権利を知ることが大事！一緒に学びあえる場がほしいという言葉にはとさせられました。
- プレゼンだけでは分からなかった「多世代と交流できる場づくり」という目的と補助金改善が、対話をすることでよく理解できました。
- 補助金にはスピード感が必要だということだが、どのくらいの期間だったら利用しやすいか？
- 少額の補助金のアイデアいいなと思いました。
- 一歩を踏み出すきっかけのハードルが下げられそうです。
- 中高生が自らやりたいことを補助金を使って実現させたいという提案良かったです。(今までは大人目線でした)

アイデア・改善点

- 市が中高生に相談できる仕組み
- 大人も参加しやすい工夫
- 情報にアクセスしてもらうための仕掛けを掘り下げて考えもらえるといいです。(そしてそれを知りたい)
- 中高生が利用しやすい補助金とはを考えていく
- 多世代として参加するすべての人にとって有意義な活動は何をしていったらよいのでしょうか？
- コミセンはコミセンごとに部屋の定員など異なっているため、調べてみると可能性がより広がると思います。
- いきなり話す緊張があるので、アイスブレイクなど工夫があると良かった。
- 人の集め方はどうするのか詳しく考えられるとよい。
- ムサカツでの出会いを活かしてネットワーク化
- 場所はコミセンだけではなく、学校も利用するといったと思った。
- 関前を元気にする会

| 項目 | ふせんの内容 | |
|-----|---|--|
| 無料 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 市外の高校生(武蔵野市在学)も気軽に使える ・ 他校も大人も外国人も無料で使える ・ 市民、市に通っている人無料 ・ 高校生までは誰でも無料で利用できる | <ul style="list-style-type: none"> ・ 栄養補給剤を無料で配布 ・ 年パス導入(5000円以内でどの施設も使い放題) ・ 友達連れてきた割引 |
| 利便性 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 徒歩30分圏内の運動施設(自転車で15分) ・ 施設までの無料のシャトルバス | <ul style="list-style-type: none"> ・ 駅から施設までの案内表示の作成(ポスターなど) ・ 駐車場、駐輪場をつくる |
| 時間 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 一年中同じ営業時間。皆が平等に運動できる時間を設けたい ・ 時間や季節関係なく、運動ができる ・ 夜遅くまで利用できる。学校後に利用したい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 例えば、夜8時頃まで使える。休日は9:00~21:00 |
| 道具 | <ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツのいろいろな道具を借りて利用できる ・ 地下に運動施設を作る | |
| 環境 | <ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツができる環境(コート、トラックなど) ・ wifi(フォームの確認のための撮影などのため) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 騒音を気にせずスポーツができる |

来場者からのコメント模造紙

感想

- たしかに近所の公園でスポーツできるところはほぼない。近さ、時間帯、料金、それぞれの面でスポーツ施設の使いにくさを感じていることを初めて知った。
- 年パスの制度はとても良い。
- 料金や利便性は実現するのにエネルギーが必要かもしれないが、道具の充実や時間の見直しは実現しやすそう。
- 高齢者が無料であれば、子どももアリ?
- 17時以降も使いたいけど、安全に過ごしたい。だから明るい室内で、ということがよく分かりました。誰が管理するかが課題だと思いました。
- 安全に使えるのが大事。
- 施設のフリーパスいいなと思いました。
- 地下施設は考えようでは存在するかも・・・
- 学校などは部活で使っているなどで利用には制限があると気づいた。
- 他校と一緒にや、グループで使いたい希望がある。
- ストリート施設の場合
- 交流したいの?単純にスポーツしたいの?
- 学校は有効活用している?
- 送迎バスは、中高生だけでなく高齢者にもいいかも。

アイデア・改善点

- 武蔵野市は狭い!人口密度が高いため、土地がない。
- 総合体育館の中に、年少者優先の時間帯を設けるのは案として出ている。
- 自治基本条例では、在学の人も市民として扱われる!だから、市内「在学」の人も同じ扱いにできるかもしれない。
- wifiはすでに整備済み。パスワードを掲示してほしい!
- 現役の選手や引退した代表選手とのスポーツ交流
- 小学生が大人と交流する場合は?自分たちのところに多世代を呼ぶ企画(今ある場の活用)
- 「本当に無料で行くの?」→「休日や放課後などに行くし、もっと行きたい」
- 「武蔵野プレイスのB2フロアは使ってる?」→「使っているが人が多すぎて(人気で)使いづらい」
- 「部活で運動?部活以外で運動?どっちがしたいの?」→「部活以外での運動がしたい」
- 「学校の運動場や体育館で足りないですか?」→「足りない。平日は部活後は使えないし、休日はそもそも全校開放ではないし・・・」
- 「スポーツを通じた同世代交流、本当にできる?」→「難しいしその人のコミュカによる」
- 「同世代交流におぜん立てはほしい?」→「できたらほしい」
- 「予算(財源)はどうするの?」→「クラウドファンディングを利用するか。でも維持費はある。」
- 「地域の(小さな)公園では遊べない?」→「狭いし、近所に配慮しないとイケなくて」
- 「道具はどんなもの?」→「普段やらないスポーツや道具の多いスポーツの補助として」
- 「送迎バスはどのようなものを想定?」→「お風呂屋さんのバスのようなもの」
- 「身体を動かすスポーツだけでいいんですか?(eスポーツ振興とかは?)」→「いいです(大丈夫です)」

| 項目 | ふせんの内容 | |
|---------------|--|---|
| 静かに勉強に集中できる場所 | <ul style="list-style-type: none"> なるべく静かなところ 静かで身近なところ。気軽に使えるところ。 | <ul style="list-style-type: none"> 普段家で集中して勉強することができないので、集中できる場所がほしい。 |
| 友だちと勉強できる場所 | <ul style="list-style-type: none"> 学校の友だちと放課後に飲食しながら勉強できる場がほしい | <ul style="list-style-type: none"> 普段はカフェなどで勉強しているが、毎回はお金がかかり大変！ |
| 施設について思うこと | <ul style="list-style-type: none"> 自分の経験から、パソコン系とふつうにお勉強系と別れて勉強できたらうれしいな。 その場所を使うルール(どっちかに守らなきゃいけない) | <ul style="list-style-type: none"> デジタル派とアナログ派など使用目的によって部屋が分けられているのが理想 防音の音読室があったらいい(英単語など発音しながら覚えたい) |
| 図書館のなかの勉強する場 | <ul style="list-style-type: none"> 中央図書館で学習できるスペースを増やしてほしい | <ul style="list-style-type: none"> 勉強するスペースをつくることで図書館の読書スペースで勉強する人を減らせる |
| オンラインの勉強の場 | <ul style="list-style-type: none"> 「オンライン自習室」があってもいい(zoomでつないでそれぞれ自習する。見守りする人がいる) | <ul style="list-style-type: none"> Youtubeのそういう場はあるが、双方向のものがいい。休憩中はおしゃべりしたい。 |
| すでにある施設の広報 | <ul style="list-style-type: none"> (コミセンの)自習室の利用をもっと知ってほしい！(特に中高生) | |

※ グループとして成立しなかったが、多くの声が挙がったテーマのため、運営事務局で整理して模造紙を掲示した。

来場者からのコメント模造紙

感想

- 勉強する場所だけでもいろいろニーズがあることがわかった。いろいろなニーズにこたえる様々な場所があるといいなあ。
- オンラインの自習室ができたらいろんな場所にいるような人が使えそう!
- 防音の音読室というアイデアが新しいなと思いました。私も暗記するときに音読する派なので、周りの目を気にせずに暗記できる場があったらありがたいなと思います。

アイデア・改善点

- たとえばどういう場所に勉強する場があるといいですか?学校の近く?駅の近く?
- コミセンの時計の秒針をなくしてほしい。
- 場所のルールについて、わかりやすい場所に明示的に書いてほしい。
- 自習室が欲しい。(長時間いられる、数がたくさんある、勉強するための空間)
- 図書館の自習室だと時間制限があったり、とても静かで逆に集中できなかつたりするので、多少のおしゃべりはゆるされるくらいの軽い場所がほしい。
- 自習スペースを使うとき、利用時間の制限に困ってしまったから、もっと利用時間を増やしてほしい!
- 文化施設が使えるかも。講演会で使用しないときは勉強用に開放する。

令和5年度

武蔵野市 中高生世代ワークショップ Teensムサカツ 事業報告書

発行日 令和6年3月

発行 特定非営利活動法人 文化学習協同ネットワーク

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-14-3

TEL 0422-47-8706 / FAX 0422-47-8709

※ 本事業は特定非営利活動法人文化学習協同ネットワークが武蔵野市の委託を受けて実施しました。

